

《初出一覽》

- 第一章……「紛争解決過程の理論枠組」『法社会学講座5』（岩波書店、一九七二年）所収
 第二章……「紛争と役割過程（一）（二）——紛争解決過程の社会的位置づけ——」『法学論叢一〇一巻四号、五号、六号（一九七七年）』所収
 第三章……「裁判をめぐるインフルエンス活動」『法社会学講座5』（岩波書店、一九七二年）所収
 第四章……「準裁判過程の基礎理論」『法社会学講座6』（岩波書店、一九七二年）所収
 第五章……「裁判外の紛争処理機関」『新・実務民事訴訟講座1』（日本評論社、一九八一年）所収
 第六章……「自律型調停への期待（上）（下）——法化社会の調停モデル——」『ジュリスト九二〇号、九二一号（一九八八年）』所収

目次

はしがき

——解題に代えて——

第一編 紛争解決過程の理論

第一章 紛争解決過程の理論枠組

- I 紛争解決過程研究の意義……………三
 II 制度分析から過程分析へ……………七
 III 紛争解決過程の諸類型……………一〇
 IV 合意による紛争解決……………一四
 V 決定による紛争解決……………一八

第二章 紛争と役割過程

——紛争解決過程の社会的位置づけ——

- I 紛争と秩序の総合的把握……………二四
 1 問題の設定（二四）……………二四
 2 構造機能分析と紛争（一）——システム論的解釈（二六）……………二六
 3 構造……………二六

機能分析と紛争(2)——規範秩序と利害状況(三〇)

II 役割過程における紛争と秩序……………三〇

1 紛争過程分析の戦略的拠点(四六) 2 役割の構造(1)——リントン・マーティンの定式化(五〇)

3 役割の構造(2)——パーソンズ・ミルズの定式化(五五) 4 役割過程の二面性(六〇)

III 役割関係安定化のメカニズム……………六五

1 同調の動機づけの強化(六五) 2 制度規範による統制(七〇) 3 制度間の機能連関(七六)

IV 役割緊張およびその処理……………八二

1 役割緊張の発生(八二) 2 役割緊張の処理(1)——パーソナリティ体系内の処理(八七)

3 役割緊張の処理(2)——社会体系内での処理(九三)

V 紛争処理の諸メカニズム……………九六

1 紛争処理の類型(九六) 2 自発的紛争処理(一〇二) 3 司法的紛争処理(一〇六)

第三章 裁判をめぐるインフルエンス活動……………一九

I 裁判の政治化現象……………一九

II 政治化の客体的条件……………二七

——裁判における権力と裁量——

III 政治化の主体的条件……………三九

——インフルエンス・グループの形成——

第二編 裁判外紛争処理過程の分析……………七五

第四章 準裁判過程の基礎理論……………七五

I 準裁判過程とはなにか……………七五

II 基本的な分析枠組……………八〇

III 過程分析の例示……………九二

第五章 裁判外の紛争処理機関……………九五

I 問題の設定……………九五

1 紛争処理機関の機能(一〇五) 2 二重の合意調達(一一〇) 3 紛争処理機関の利用(一二五)

II 解決案への同意……………一二六

1 仲介機能(一二七) 2 判断機能(一三三) 3 強制機能(一三七)

III 解決方式への同意……………一三四

1 利用と応答(一三四) 2 仲裁合意の困難(一三七) 3 合意調達の手当て(一四二)

IV 裁判の役割……………一四七

1 裁判の利用可能性(一四七) 2 合意調達の瑕疵(一五〇)

第六章 自律型調停への期待

——法化社会の調停モデル——

I	調停の現代的再生	二五
II	紛争解決行動と調停の選択	二六
	1 第三者機関の利用(二六)	
	2 自主交渉(二六)	
	3 調停の選択(二七)	
III	調停選好の意識	二七
	1 第三者機関選択との関連(二七)	
	2 社会意識との関連(二七)	
IV	自律型調停の可能性	二六
	1 調停制度の構想(二六)	
	2 自律型調停(二六)	

索引